

## 国際協力の憂鬱：グアテマラでの2年間を振り返って

前回までの記載のとおり、グアテマラでは「治安の悪い都会での暮らし」と「誰も居ない職場」にどうしても馴染めず、常に強いストレスを感じながら生活していた。そうするうちに、隊員活動の意義を見出せないまま時間だけが過ぎていき、焦燥感に駆られて自問自答の迷宮から抜け出せなくなってしまった。その結果、長期にわたって体調を崩すことになり、私の国際協力活動は不完全燃焼に終わったと感じている。それでも、この体験から自分なりに得られたものがある。最終回として、グアテマラでの2年間をやや肯定的に振り返りたい。

### 1. 幸せというもの

自分の活動に対しては、帰国して10年以上が経過した今でも悲観している。この評価は今後変わらないだろう。しかし、落ち着いて振り返ってみると、日本との時差が15時間もあるグアテマラに住んでわかったことが少しある。それは、「世の中には、いろんな所にいろんな人たちがいて、いろんな価値基準を持って生活していること」、そして「それはそれでよく、ただそれだけのこと」である。日常でよく耳にする“言葉”かもしれないが、それを体験できたことに大きな意味があった。

これに気付いたきっかけは、調査で訪れた山間の村（写真1）に住む男性とのふとした会話の中にある。彼には子どもが9人できた。しかし、そのうちの3人は栄養不足と不衛生が原因で亡くなってしまった。それにもかかわらず、彼は屈託のない笑顔で私にこう語った。

「村がどんなに貧しくても、どんなに劣悪な環境に置かれても、今の家族と一緒に暮らせているから幸せだ。心からそう思う。」

これを聞いた時、彼はまるで“幸福の領域”にすでに到達しているかのように思えた。だがそれは違った。“普段から幸福でいること”こそが、望ましい生き方であることを私が学ばなければならなかった。自己肯定感の欠片もなかった私は、幸せは身近にあるものだとこのとき初めて気付かされた。そうして、幸福とは誰かと比べる相対的なものではなく、個々の価値基準に応じて自分で判断することによって得られるものであることを理解した。

こうした視点に立つと、誰もが幸せを実感できる社会を構築するためには、「行き過ぎた競争社会から一步身を引き、人と人の間の視座から世の中を見据え、“優しさ”という勇気をもって互いに助け合うことが肝要」と考えられるのではないだろうか。この先、自分が豊かになっても



写真1. 山間の村.

貧しくなっても、困っている人がいれば、そこに自然と手を差し伸べられる意欲を失ってはいけません。そう考えられるようになってから、心のしこりが少しほぐれたような感じがした。

## 2. 友人たちとの出会い

加えて、この国に住んで気付いたことがもう一つある。それは、「知らなかった国で、知らなかった人に会い、知らなかった言葉で話して、そして知り合えた」ことである。これに、日本から遠く離れた土地で暮らした意義が集約されている。

中米のグアテマラで暮らした2年間で、自分なりにたくさんの出会いがあった。既述したホームステイ先の姉妹や、配属先だった植物園で仲の良かった同僚たち（写真2）、JICA事務所の現地スタッフたちには、本当の家族のように可愛がってもらった。こんなにも卑屈で不器用な私を、初めて会ったときから手放しで迎え入れてもらえて素直に嬉しかった。ときには一緒に大いに笑い、ときには悲しみを慰め合い、そして、一献傾けながら互いの未来を真剣に語り合った。彼らと共に過ごした日々を決して忘れはしないだろう。



写真2. 植物園の同僚たち。第2回到登場した同僚はここにはいない。

知らぬ間にグアテマラの文化に溶け込み、そのうえで客観的に日本を見つめる感性を養えたことは、何事にも替え難い財産となっている。こうした感謝の気持ちでいられるのは、ひとえに出会えた最高の友人たちのお陰である。散々迷惑を掛けたにもかかわらず、私がつまづく度に、彼らはいつも親身になって支えてくれた。積もりに積もった数々の恩を思い出すと、今でも胸がいっぱいになる。私がグアテマラに来た“意義”は、彼らとの出会いによって、とうに見出されていたのである。何とも情けないが、このことに気付いたのは帰国間際だった。2年間の活動が終了し、日本という極東の地に帰った後も、ときどき空を見上げてはグアテマラでの懐かしい思い出にふけることがある。友人たちは、今でも私の体調を気遣うように連絡をしてくれる。2011年の東日本大震災では、多くの友人から心配と励ましのメールが届いた。感謝しきれない。

末筆ながら、私に掛け替えのない夢と感動を与えてくれたグアテマラ共和国とその国を愛する素晴らしい友人たち、そして、グアテマラにかかわる森羅万象すべてに心より感謝申し上げます。グアテマラの治安が早急に改善され、よりよい発展を遂げることを願ってやまない。